

「真実の宗教」 (十九)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

〈開式挨拶 佐々木玄吾護持会会長〉

おはようございます。先程一時間前に、ここで役員会がありまして、お世話の者が集まりました。そうしましたら、本日は七十三名のご参加を賜ることとして、報恩講としては初めてのことで、光照寺の本当の繁栄を皆さんと共に欲びたいと思います。これはひとえに御住職を先頭として、御寺族のご精進、そして、護持会の方々の御協力の賜物と大変ありがたく、うれしく思います。

蓮如上人は、「一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なる事にてはなく候う。一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁昌に候う。」（『蓮如上人御一代記聞書』八七七頁）と言われました。

また、本日の講師の櫟暁先生は、本当の報恩というのは、信心の人になることだと言われています。どうしたら信心の人になれるのかということですが、それは、この光照寺のやられているように、聞法、御法を聞くという年間計画を立てて、着々として歩むことだと思います。

光照寺の二十一年間の歩みは間違いないものと思います。皆さんと共に、本日もしっかり聞法してがんばりたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

〈住職挨拶〉

皆様、ようこそこの報恩講に御参詣下さいましてありがとうございます。ご挨拶と機暁先生のご紹介をしたいと思います。

去年は、報恩講二十回目の記念すべき報恩講を迎えさせていただきました。今年は、二十一日の報恩講ということで、また心を新たにして重い伝統の中に歩ませていただくという決意を持って今日望んでおります。ひとえに一回、二回と回を重ねてこられたことも皆様のご支援と、それから法縁の支えがあつて、歩ませていただいたと思つて感謝しております。浄土真宗は、副住職がご案内した文章の中にありますように、報恩講教団と云われる教団でありまして、親鸞聖人の祥月命日を機縁として、本山では十一月二十八日を御満座として一週間前から勤まっております。わけであります。ご存知のように本山の報恩講に参りますと、坂東節という身体を揺すつて大きな声で勤まる坂東節が有名でございますが、光照寺は十月に報恩講が勤まりまして、本山では来月の十一月二十八日が親鸞聖人の御命日ですから、それを契機に一週間前から執り行われるわけです。是非、御満座に勤まる坂東節をひとつ聞いて頂くと、本当に感動するのではなからうかと思ひます。

また、今年は七百五十回御遠忌の御正当でございます。御正当というのは五十年、五十回

忌ごとに勤まるご法事でございます。ですから七百五十回、前回は七百回御遠忌ということ、五十年経ちまして、今年が御正当忌になっております。是非、本山に上つていただくとありがたいことだと思います。

浄土真宗の伝統は、まずご家庭で報恩講を勤め、それからお手次寺で報恩講を勤め、それから本山に参つていくという、云つてみれば赤尾の道宗が手本だと、このように教えられていることでございます。

光照寺は、新しいこういう小さな寺でございますが、しかし、こういう重い七百五十回忌を迎える七百五十年の法灯、伝統、それから伝承の中に新しく寺として誕生した寺でございますが、その伝統を本当に汲んで勤めていきたいという、初心忘るるべからずということ、いつも私自身が緊張して力が入ってしまうというのが常なのですが、今日も力が入っております。何とか抜こうと思うのですが、入っております。こんなことを申して、記念すべき二十一回目の光照寺の報恩講は勤まることでございます。

櫟先生のご紹介をしたと思うのですが、前回二十回目なので、結構長くお話いたしました。皆様のお手元に、今日お上げした去年の報恩講のテープ起こしが非常に厚くできております。その中にも、櫟先生のご紹介を含めておりますので、なるべく重ならないでどうご紹介できるかが、今ここに立っている私の辛さでございます。

それでも、櫟先生は今年、米寿八十八歳になりました。このようにお元気であります。ただ、耳が遠いことでありまして、それは詳しくは聞いていないのですが、ちらっと聞いたかなと思うのですが、戦争に行かれて、私が想像するには、銃弾か何かで耳が遠くなってしまったのではないかと勝手に思っております。できたらそういうところも先生にお尋ねしてみるとよろしいのではないかと思います。益々このところ不自由であるということですが、しっかりとした近代兵器のマイクをお使いになられておりますので、先生は一言も漏らさず聞かれる方ですし、一言も間違えないで話される先生でございますから、何なりとお聞きしていただくとうろしかと思います。

八十八という米寿を迎えられた先生ですが、まだまだお元気です。櫟先生の先生は曾我量深先生でございます。櫟先生は、八十歳になって「我々青年は」と云った曾我先生を先生としていらっしゃるわけですから、精神世界は八十八歳になって「我々青年の」ところに櫟暁先生はおられると私は勝手に思っております。精神世界は若いと思いますが、肉体の老化はこれは止むを得ない。私も、精神世界は先生に負けずに青年よりか、もっと童心よりか、もっと赤心、幼心まで本当にいつてみたいと思っております。余計なことを申しました。

まあ、そういうことで、櫟先生は元教学研究所の所長、本山の教学研究所の所長をお勤めになり、それが一つの機縁となりながら、東京教区教化の教導をお勤めになりました。その東京に出

てくる前に、浅草のほうでございますが、先生のお話を聞いたのですね。前回もちょっとお話ししましたが、柳川さんが、その時のテープを起こしてくださっております。その時のテープを録ったのは、白川さんという、東京教区のご門徒さんで、それをテープ起こしたものを、去年皆さんにお渡ししたことでございました。私も懐かしく、櫛先生に初めて会ったのが、その去年お渡しした内容でございましたので、非常に懐かしく感動いたしました。

それが機縁で、長川一雄先生と、私もご縁のあった先生ですが、行徳庵という聞法道場を住まいに持っております、その所にも櫛先生が来られて、私はそこでは質問もしたりしたのですが、私が丁度、坊主の学校を昭和六十年に卒業したのですが、その時に、私が不思議と九州の先生方にご縁があったので、卒業を機縁に、九州のお世話になった先生方を巡ったのです。その時も、櫛先生の鹿兒島の法泉寺さんを訪ねてみました。大変ご馳走してくださいました。

その時の様子を愚庵落慶、愚庵という聞法道場を創ったのが機縁ですが、その時の落慶の櫛先生のご挨拶が、「池田さんが卒業記念の旅行で我が寺に訪れてくださいました。」と云われましたのですが、私は卒業記念旅行という思いはなかったのですが、そのような挨拶をされたことが私の耳の底に残っております。

そんなことがありまして、現在この一回、二回は、細川巖先生に報恩講に来ていただきまして、ご病気で亡くなられまして、その後ずっと櫛先生に月々の聞法会「親鸞聖人のみ教えに聞く会」

と、それからこの報恩講を担っていただいて、ご教化をいただいていることでございます。

先生のお話を本当に一緒に聞かせていただきたく思っております。それが報恩講の報恩の真をいただく、先ほどの『御俗鈔』ではないですが、この報恩講のみぎん(砌)にいたって信心を得ていただくというように『御俗鈔』にあったのですが、是非、そういう機会になっただければ、誠にありがたいことだと思っております。

先生は三重県の生まれで、ご長男が三重県のお寺を担っておられます。櫟先生は、鹿児島の荒れ寺といったら語弊があるかもしれませんが、無住といっても語弊があるかもしれませんが、その鹿児島の寂び寂びとしたお寺を再建されて、住職を務められ、そして、次男さんにその鹿児島のお寺の住職を譲っておられます。それで今、前任職となっておられるのです。皆さん、鹿児島、光照寺でも旅行に行きましたけれども、隠れ念仏ということで、島津藩では念仏を停止しております、明治になってから、隠れていた念仏が、一挙に大地に躍り出てくるようなかたちで、鹿児島は非常に念仏が盛んなのです。私も光照寺の旅行で知りましたけれど、隠れ念仏を訪ねるという旅をしたのですが、お寺に住職がないというのが本来だったらしいですね。むしろ、輪番といいましょうか、まわって歩くようなかたちが、明治の本願寺の歴史の流れを汲んでいるようであります。

しかし、櫟先生はそういうお寺の中で住職として再建され、自らそこに身を据えて、命がけの

再建をして、次の次男さんに鹿児島のお寺、法泉寺を譲り、自分の生まれた三重県はご長男に譲ったという凄い生きざまをお持ちであります。

戦争が終わった後、本当に何を依り処にしているかわからなくなった、そんな中で曾我量深先生に出会い、真宗まことという中に宗教体験を経て、今日、非常に深く教学を研鑽されながら、信心を顕かにし、親鸞聖人の教えを顕かにしておつてくださる、非常に稀有なる、貴重なる先生でございますので、ひとつ聴聞していただきたいと思います。

〈資料一〉

無碍光（聖典抄出・報恩講法話資料）

仏説無量寿経卷上 三〇―L十一

このゆえに無量寿仏を、無量光仏・無辺光仏・★無碍光仏・無対光仏・焰王光仏・清浄光仏・
歡喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。それ衆生ありて、
この光に遇えば、三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踊躍し善心を焉に生ず。もし三塗・勤苦
の処にありてこの光明を見たてまつれば、みな休息することを得て、また苦悩なけん。寿終わ
りて後、みな解脱を蒙る。

教行信証（行） 一五七―L二

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち★無碍光如来の名を
称するなり。この行は、すなわちこれもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速
円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願
より出でたり。

教行信証（行） 一六八―L十

「我一心」は、天親菩薩の自督の詞なり。言うところは、★無碍光如来を念じて安楽に生まれんと願ず。心心相續して他相間雜なし。乃至「歸命尽十方★無碍光如来」は、「歸命」はすなわちこれ礼拝門なり、「尽十方★無碍光如来」はすなわちこれ讚嘆門なり。何をもってか知らん、歸命はこれ礼拝なりとは。龍樹菩薩、阿弥陀如来の讚を造れる中に、あるいは「稽首礼」と言い、あるいは「我歸命」と言い、あるいは「歸命礼」と言い。この『論』の長行の中に、また「五念門を修す」と言えり。五念門の中に、礼拝はこれ一なり。天親菩薩すでに往生を願ず。あに礼せざるべけんや。かるがゆえに知りぬ、歸命はすなわちこれ礼拝なりと。しかるに礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも歸命ならず。歸命は（必ず）これ礼拝なり。もしこれをもつて推するに、歸命は重とす。偈は己心を申ぶ。宜しく歸命と言うべし。『論』に偈義を解するに、ひろく礼拝を談ず。彼・此あい成ず、義においていよいよ顕れたり。

教行信証（行） 二〇六―L一

天親菩薩、論を造りて説かく、★無碍光如来に歸命したてまつる。修多羅に依つて眞実を顕して、横超の大誓願を光闡す。広く本願力の回向に由つて、群生を度せんがために、一心を彰す。

教行信証（信） 二一三―L十四

「如彼名義欲如实修行相應」とは、かの★無碍光如来の名号よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願を満てたまう、しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざ

るはいかんとならば、実のごとく修行せざると、名義と相応せざるに由るなり。

尊号銘文 五一八―L三

「**歸命尽十方★無碍光如来**」ともうすは、**歸命**は南無なり。また**歸命**ともうすは、**如来**の勅命にしたがうころなり。尽十方★無碍光如来ともうすは、すなわち**阿弥陀如来**なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。★無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、**阿弥陀**なり。この如来はすなわち**不可思議光**ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方**微塵刹土**にみちたまえるなりとするべしとなり。「**願生安楽国**」というは、**世親菩薩**かの★無碍光仏を称念し、信じて**安楽国**に生まれんとねがいたまえるなり。

尊号銘文 五一八―L十

「**我依修多羅 真實功德相**」というは、**我**は天親論主のわれとなのりたまえる御ことばなり。依はよるといふ、修多羅によるとなり。修多羅は**天竺**のことば、仏の經典をもうすなり。仏教に大乘あり、また小乗あり。みな修多羅ともうす。いま修多羅ともうすは大乘なり。小乗にはあらず。いまの三部の經典は**大乘修多羅**なり。この三部大乘によるとなり。真實功德相というは、**真實功德**は誓願の尊号なり。相はかたちということばなり。「**説願偈総持**」というは、本

願のことはをあらわすことばを偈というなり。総持というは智慧なり。★無碍光の智慧を総持ともうすなり。「与仏教相応」というは、この『浄土論』のころは、釈尊の教勅、弥陀の誓願にあいかなえりとなり。

尊号銘文 五二三―七一

「言護念増上縁者」というは、まことの心をえたる人をこのよにてつねにまもりたまうともうすことばなり。「但有専念 阿弥陀仏衆生」というは、ひとすじにふたごころなく弥陀仏を念じたてまつるともうすなり。「彼仏心光 常照是人」というは、彼はかという、仏心光は★無碍光仏の御ころともうすなり。常照は、つねにてらすともうす。つねというは、ときをきらわず、日をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人をばつねにてらしたまうとなり。てらすというは、かの仏心のおさめとりたまうとなり。仏心光は、すなわち阿弥陀仏の御ころにおさめたまうとするべし。是人は、信心をえたる人なり。つねにまもりたまうともうすは、天魔波旬にやぶられず、悪鬼悪神にみだられず、摂護不捨したまうゆえなり。

一念多念文意 五四五―七一

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。かかるあさましきわれら、願力の白道を一分二分、ようよう

ずつあゆみゆけば、★無碍光仏のひかりの御ころにおさめとりたまうがゆえに、かならず安楽浄土にいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚のはなに化生して、大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。これを致使凡夫念即生ともうすなり。二河のたとえに、一分二分ゆくというは、一年二年すぎゆくにたとえたるなり。諸仏出世の直説、如来成道の素懐は、凡夫は弥陀の本願を念ぜしめて、即生するをむねとすべしとなり。

唯信鈔文意 五四七―七八

「如来尊号甚分明」、このころは、「如来」ともうすは、★無碍光如来なり。「尊号」ともうすは、南無阿弥陀仏なり。「尊」は、とうとくすぐれたるとなり。「号」は、仏になりたまうてのちの御なをもうす。「名」は、いまだ仏になりたまわぬときの御なをもうすなり。この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかいの御なり。この仏の御なは、よろずの如来の名号にすぐれたまえり。これすなわち誓願なるがゆえなり。

唯信鈔文意 五四八―八二

「十方世界普流行」というは、「普」は、あまねく、ひろく、きわなしという。「流行」は、十方微塵世界にあまねくひろまりて、すすめ、行ぜしめたまうなり。しかれば、大小の聖人、善悪の凡夫、みなともに、自力の智慧をもつては、大涅槃にいたることなければ、★無碍光仏の

御かたちは、智慧のひかりにてましますゆえに、この仏の智願海にすすめいれたまうなり。一切諸仏の智慧をあつめたまえる御かたちなり。光明は智慧なりとするべしとなり。

無碍の一道

歎異抄 六二九―七四

七 念仏者は、★無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、★無碍の一道なりと云々

〈資料二〉

光如来

尊号銘文 五一八―L三

「歸命尽十方無碍光如来」ともうすは、歸命は南無なり。また歸命ともうすは、如来の勅命にしたがうところなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。★光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとしるべしとなり。「願生安樂国」というは、世親菩薩かの無碍光仏を称念し、信じて安樂国にうまれんとねがいたまえるなり。

〈資料三〉

佛様とは

一、仏様とはどんな人か

答 仏様は、われは南無阿弥陀仏と申すものであると名のつておいでになります。

二、その仏様はどこに居られるか。

われを南無阿弥陀仏と念じ称える人の直前においでになります。

三、そんならその仏を私達が念ずるにはどのような方法がありますか。


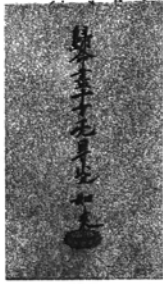
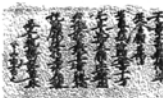



南無阿弥陀仏と、一念疑いなく自力のはからいをして、静かなる心をもって、仏願わくはこの罪深き私をたすけましますと念ずるのであります。





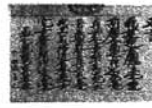



これはだれでも、どこにいても、いつでも、かなしい場合でも、うれしい場合でもたやすく自由に仏を念ずることができるのです。

この念が現前する時いかなる煩惱妄念が襲い来っても内心の平和は絶対にやぶれません。是を真の救済と申します。以上

日本国昭和三十一年一月二十一日

於米國羅府 東本願寺 曾我量深 誌之

①	②	③	④
<p>上段の讀文・画</p>  <p>無量壽如來會言 若我成仏国中有 情若不決定成等 正覺證大涅槃 者不取正覺</p>	<p>上段の讀文・文</p> <p>大無量壽經言 說我得仏光明有能限量 下至不照百千億那由他諸 仏国者不取正覺 說我得仏壽命有能限量下 至百千億那由他劫者不取 正覺</p>	<p>中央の名号・画</p> 	<p>下段の讀文・画</p>  <p>無量壽經偈要 提舍願生偈曰 世尊我一心佛命盡十方 无專光如來願生安樂国 我依修多羅真実功德相 說願佛總持与仏教相應 愿先親賢敬信尊号 八十四歳書之</p>
<p>中央の名号・文</p> 	<p>下段の讀文・文</p> <p>大無量壽經言 說我得仏十方衆生至心信 衆欲生我國乃至十念若不 生者不取正覺唯除五逆時 勝正法 又言 其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転 又言 必得超絶去往生安樂国 横截五惡趣惡趣自然閉 其国不逆違自然之所奉 昇道無窮極易往而無人 其国不逆違自然之所奉</p>	<p>下段の讀文・文</p> <p>無量壽經偈要提舍願生偈 世尊我一心佛命盡十方 无專光如來願生安樂国 我依修多羅真実功德相 說願佛總持与仏教相應 親彼世界相勝過三界道 究竟如虚空広大無辺際 又曰 願仏本願力過無空過者 能令速満足功德大宝海 愿先親賢敬信尊号 八十三歳書之</p>	<p>裏書</p> 
<p>下段の讀文・文</p> <p>大無量壽經言 說我得仏十方衆生至心信 衆欲生我國乃至十念若不 生者不取正覺唯除五逆時 勝正法 又言 其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転 又言 必得超絶去往生安樂国 横截五惡趣惡趣自然閉 其国不逆違自然之所奉 昇道無窮極易往而無人 其国不逆違自然之所奉</p>	<p>裏書</p> 	<p>その他解説</p> <p>・専修寺藏 上段讀銘の紙 背横位置に 「方便法身尊号 康元元丙辰十 月廿五日書之」</p>	<p>その他解説</p> <p>・妙源寺藏 (高田派) ・方便法身尊 号 康元元年十 月廿八日書之</p>
<p>その他解説</p> <p>・専修寺藏 上段讀銘の紙 背横位置に 「方便法身尊号 康元元丙辰十 月廿五日書之」</p>	<p>その他解説</p> <p>・専修寺藏 上段讀銘の紙 背横位置に 「方便法身尊号 康元元丙辰十 月廿五日書之」</p>	<p>その他解説</p> <p>・専修寺藏 上段讀銘の紙 背横位置に 「方便法身尊号 康元元丙辰十 月廿五日書之」</p>	<p>その他解説</p> <p>・専修寺藏 上段讀銘の紙 背横位置に 「方便法身尊号 康元元丙辰十 月廿五日書之」</p>

⑦	⑥	⑤
 <p>大無量壽經言 設我得仏十方衆生至心信樂 欲生我國乃至十念若不生者 不取正覺唯除五逆勝正 法 設我得仏國中人天不住定 聚必生滅度若不取正覺 願无觀響信尊号 八十四歳書之</p>	 <p>設我得仏十方 世界无量諸仏不 悉咨嗟称我名 者不取正覺</p>	<p>讀文なし</p>
		
		<p>讀文なし</p>
<p>又言 必得超絶去往生安 養國横截五惡趣 惡趣自然閉昇道 無窮極易往而無 人其国不逆違自 然之所奉 康元元丙辰十月廿八 日 書之</p>	<p>又言 我建超世願必至无上道 斯願不満足誓不成正覺 我於無量劫不為大施主 普濟諸貧苦誓不成正覺 我至成仏道名号超十方 究竟願所聞響不成正覺 願无觀響信尊号 八十四歳書之</p>	<p>讀文なし</p>
		
<p>・西本願寺蔵 八十四歳</p>	<p>・専修寺蔵 八十四歳 ・上部紙背に「方 便法身尊号 康 元元丙辰十月廿 五日書之」</p>	<p>・専修寺蔵 八十四歳頃 ・蓮台なし ・「本尊となすべく 未完成におわつた とすべきである う」(『親鸞聖人 真蹟集成第九卷』 解説 藤島達郎)</p>

参考『親鸞聖人真蹟集成 第九卷』

⑧ 「南無阿彌陀佛」(東本願寺蔵)

※⑤と⑧を抜いた六種類が完成されたもの

〈法 話〉

ご住職様からご丁寧なご紹介を頂きました、鹿児島教区法泉寺前住職の櫛暁でございます。何回もこうして報恩講の法話をさせて頂きました、ありがたく存じております。本年もまたわずか一時間半くらいの時間ではありますが、私の信ずるところを聞いて頂きたいと思えます。

先程の『正信偈』のお勤めの後に拝読されたのが、蓮如上人の書かれた『御俗姓』と申します。『御俗姓』と申しますのは、親鸞聖人の姓のことが書いてありますので、それを『御俗姓』と申しておりましたが、その『御俗姓』をお作りになった意味はどこにあるかと申しますと、私たちが報恩講をお勤めする本当の意味はどこにあるのかということ明らかに示されたものであります。この『御俗姓』をお書きになりました時は、蓮如上人が河内の国ですね、大阪府の出口という所におられまして、急に思い出して、この『御俗姓』をお書きになったようであります。『御俗姓』をお書きになった時は、親鸞聖人が亡くなられて二〇〇年経った時です。『御俗姓』の中には、文章のあやで「一百余歳」と書いてありますが、年表を見ますと、丁度二〇〇年経った時であります。二〇〇年も経ちますと、報恩講をお勤めする本当の意味がわからなくなって、習俗化してしまった。習俗化というのは、去年もお勤めしたから今年もお勤めしなければならぬと

というようなことで、そのお勤めをする行事だけが続いている。こういうことでございます。それではいけないと蓮如上人が仰いまして、なぜ報恩講をお勤めするのか、それは、私たちが頂いている本願の御恩と、親鸞聖人の教えの御恩というものは何よりも高いものである、また、深いものであるということが、難しい言葉で表わされております。『聖典』を持つている方はご覧いただきたいと思えます。八五一頁です。この八五一頁後ろから四行目、

「かの御恩徳ごおんとくのふかきことは、迷慮めいろ八万の頂いただき、蒼暝そうめい三千の底そこにこえすぎたり。」（『聖典』八五一頁）

難しい言葉で書いてあります。これは平たく云えば、ヒマラヤ山のような高い山よりもまだ高く、この世界中で一番深い海よりもまだ深いという意味であります。それで私たちは、深く広く高い御恩を頂きながらそれを忘れてしまっている。そこで、私たちは毎年毎年、親鸞聖人の御命日に報恩講をお勤めして、そのことを確認させて頂いて、私たちが報謝する。報謝とは御恩に報いるということです。お恵みにお報いするということは、どういことがお報いすることであるかということになるかということを書いておられるわけです。それは他ではない、親鸞聖人と同質の信心を私たちは会得することが報謝になる。特別の何かお祭りのようなことをするというようなことではなく、報恩ということは、我々の信心が親鸞聖人の一生涯かかっ

て得られたところの信心と質の違う信心で生きているならば、これは報謝にならない。親鸞聖人と同質の信心を我々が会得させて頂くことが報謝になるのだということを述べておられると私は思うのであります。

「此の七か日報恩講の砌にあたりて、門葉のたぐい国郡より来集、いまにおいて其の退転なし。しかりといえども、未安心の行者にいたりては、争でか報恩謝徳の義これあらんや。」（『御俗姓』八五一頁〜八五二頁）

自分の信心が親鸞聖人と質の違う信心であるならば、どうして報恩謝徳になりましようかと問題提起をしておられるわけであります。

そこで、話を現代に移しまして、皆さん、NHKのテレビをご覧になつておられると思います。日曜の朝五時から六時までの「心の時代」、これは宗教だけではありませんけれども、大体宗教のお奨めの番組であります。それはとにかくとして、それ以外に毎日ニュースとか解説番組に出てる宗教は、ほとんどが祈りということです。仏教であろうが、キリスト教であろうが、神道であろうが、お参りしている姿を合掌したり拍手をしたりしている姿を写真に出して、今、お祈りをしております、とこういうことなのです。

それで、私は祈りということについて、ある先生が、宗教というのは祈りということがなかったならば、宗教は成り立たないのだということ云われた。真宗もそういう意味では、祈りなのだ云われた。それに私は深く考えさせられるところがありまして、祈りは祈りであっても、これは我々の小さな祈りではなくして、如来の祈りだ。如来とは、仏が我々にどうかたすかってくださいと。どういう生活をしておられようと、間違いないたすかる道を聞き開いてください。そうしなければ私は仏になりませんという、そういう深い祈りを仏が我々にかけておられる。本願ということをごいう具合に頂いたらどうかと思います。

私たちが、どうか病気を治してください、どうか志望校に入学させてください、どうか長命になるようにしてくださいというような、自分の個人の祈りとか、会社のことを祈るとかいう、私利私欲で祈るといふ祈りのことを、一般には祈りと云っている。しかしそういう祈りは、浄土真宗の教えから云うならば、それは煩惱が變形したものである。ですから、如来の祈りは同じ字を使いましても、質のちがう如来の祈りということなのです。

如来の祈りというのは、南無阿彌陀仏という言葉をもって、我々を救い尽くそうという仏の祈りです。その祈りを私たちが素直にありますがどうぞございますと頂けるようになってるか否かというところが問題です。如来の祈りが頂けるようになれば、小さな私の煩惱の變形したような祈りというものに引つかからない。また、そういう祈りの対象としている絶対者に引つかからない。そ

ういう世界を会得させて頂く。私はそれが非常に大切だと思えます。

それで、浄土真宗には『教行信証』をはじめとして、沢山の親鸞聖人の御著作がこの『聖典』に入っております。また、親鸞聖人だけでなく、歴代の門主の『御消息』なども沢山ございます。『御消息』というのはお手紙です。その中の代表的なものが、先程お話ししました蓮如上人の『御文』です。大谷派の方では『御文』と申します。本願寺派では『御文章』と云われているようです。これはどちらでもお手紙です。蓮如上人が、北陸ですと教えを伝えている時に、身は一つですからあちらにも行き、こちらにも行くようなことは同じ日にできませんので、自分の仰りたいことを弟子に渡してこれを伝えてくれというようなことから、『御文』が始まっているわけでありまして、これはお手紙です。そのお手紙の模範になるのが、親鸞聖人の『御消息』です。『御消息』というのは、京都からこの関東の門弟のいろいろな質問に答えておられるお手紙が沢山残っております。一生涯、亡くなる二年前まで克明にこのお手紙を書いて関東に送っておられるわけであります。そのような信仰上のお手紙です。普通の手紙ではありません。信仰上の手紙が沢山残っておりますが、そういうものを一切まとめて親鸞聖人の教えを聞くために『真宗聖典』の中の『御消息集』が出来上がっているわけであります。

徳川時代までは蓮如上人の『御文』を中心にして寺院の教化がなされてきた。『御文』のお説教です。報恩講に私が鹿兒島教区の別院で勤まっておるのに参加しまして、御文説教というのが

あります。御文説教とはどういうことかと申しますと、僧侶が一人出てまいりまして、自分の安心のありがたいことを述べられて、肝要は『御文』にと云うわけです。肝要とは、大事なことは『御文』に書いてありますから、それを拝読しますと云って、法話が終わってから『御文』を読まれる。そういう御文説教というような形式が残っております。このように徳川時代は蓮如上人の『御文』を中心にして教化がなされてきたわけであります。

ところが明治になりました、蓮如上人の『御文』だけで親鸞聖人の教えを深く伝えるということとはちょっと問題だということに気が付いて 親鸞聖人のお言葉を頂かねばならない。親鸞聖人のお言葉を頂くのには一番手っ取り早いのは、お弟子の唯円大徳が自分で親鸞聖人から直接聞かれた『歎異抄』を読むことが大事だということを、清沢満之先生がお感じになられて、今まで普通の人が読んではいけなさと云われ、読むことを留め置かれた『歎異抄』を、明治以後ずっと一般の人に読めるようなきっかけを作って頂いたわけです。

今日も真宗と云えば『歎異抄』、親鸞聖人と云えば『歎異抄』、とこういう具合に『歎異抄』が普及しまして、多くの人たちがそれぞれの立場で『歎異抄』の心を述べている解説書が無数にあります。そういうことで、私もご縁がありまして『歎異抄』を読ませて頂きました。

私は先程ご紹介に預かりました三重県の鈴鹿市の生まれでございますが、私の生まれた寺で長いことお説教を障子垣越しに聞いてまいりました。昔の説教は、お念仏をした者は、親鸞聖人の

教えを聞いてお念仏した者は、命終わったらお浄土に迎えられる。それがありがたいことなのだと欲ばせてもらう。お前を捨てないぞとお浄土に迎え摂っていたたくありがたいものだという、そういうものでした。だから念仏しなさい、御念仏することが御恩報謝になる。そして、大体お説教は、往生ということは、おたすけということは、みな死後の問題として説かれてきたわけです。

ところが、清沢満之先生のお力で、往生ということは死後の問題ではなくて、我々苦しんでいるものが生きている間に、苦惱から完全に開放される精神の世界を生きることができるようになるのが、往生ということなのだということを、清沢満之先生が明治になってからはっきりと教えてくださったわけです。他力の救済。「我は現に救済されつつあるを感じず。」というお言葉が非常に印象的であります。親鸞聖人の教えをもし私が頂かなかつたならば、「迷乱と悶絶を免れざれしなるべし」。迷乱とは頭が混乱してしまう。悶絶とは悩み苦しんで、もうどう生きていいのかわからないような状態。生きることができず、死ぬこともできないような真つ暗闇の暮らしをしなければならぬ私が、親鸞聖人の教えによって、

「悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。我は実に此の念によりて、現に救済されつつあるを感じず。」（『他力の救済』）

こういう愚かな私が救われておるのだということを、亡くなる二ヶ月前に仰っている。清沢満之先生は、肺結核で痰壺をいつも使っておられたような方で、今日の癌よりもっと恐ろしい結核であられた方が、そういう状態の中で、「我は現に救済されつつあるを感ず。」という非常に深い喜びを述べておられるわけであります。

それで、私はそのことを暁鳥先生のお話を聞いて、小さい時にそういう言葉があるのだということを知っておりました。ところが、先程もご紹介の中でありましたように、丁度私の青年時代は軍国主義の時代でありまして、私は西暦一九二三年生まれでございます。丁度昭和十八年で満二十歳、兵隊にとられまして、今まで経験したことのない人殺しの世界に入らせられたわけであります。

とにかく自分が殺されない前に人を殺せ。こういうことです。戦争というのはまことに罪の深いものでありまして、最後は白兵戦といって、銃の先に剣を付けて、「ヤーッ、ヤーッ」と敵を突き殺す。こんな練習ばかりやっていた。ところが戦争が末期になりますと、そういう白兵戦ではだめだ、戦車がやってきたら銃の先に剣を付けたぐらいで防げるものではないから、皆一人一人、二十センチ立方の箱に黄色い火薬をいっぱい入れて、それを抱いて戦車の下に潜り込んで、導火線を引いて、我が身もろともに爆破することで戦車を倒さなければだめだと、そういう訓練ばかり。命一つに戦車一台。それは飛行機の方でも同じようなことですが、私は航空隊ではあ

りませんので、戦車を倒す訓練ばかり受けておりました。まことに浅ましいことです。

それで戦後悩みまして、こういう青年時代を送った私はこれからどう生きていきたいのかということが、一番の問題になりました。親は怪我せずに帰ってきてよかったと云ってくれたのですが、私自身がこれからどう生きていきたいのかわからないという状態で悩み続けまして、自殺を思いまして、やりかけたのですが死ぬことができない。生きることもできず、死ぬこともできないような状態の時に、九州の福岡県の糸田町から京都に出てこられた藤代聰磨先生という先生がおられて、「お前は曾我先生の教えを聞かなければたすからない。」と云われまして、曾我先生の教えに遇わせて頂いて、まず第一に聞かせていただいたのは、『歎異抄』の第一章なのです。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。（『聖典』六二六頁）

こういうお言葉ですからねえ。私はびっくりしました。こういう世界があるのかと。以前に国語の教科書として『歎異抄』を学習したことはありましたが、その深い内容というものは全

くわかりませんでした。曾我先生の教えを聞かせて頂いて、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、」というこの最初の言葉、それは、あなたを救済しなければ私は仏にならんと誓っておられる如来の祈りに触れよということ。ちっぽけな自分で自分の心をどうかしようというようなはからいを捨てて、如来の大きな祈りに触れよという大きな叫びです。曾我先生は、『歎異抄』の第一章は、『教行信証』では『教巻』にあたる。『教巻』は、『大無量寿経』が真実教であるということであらわしておられる一巻です。一番短い。最初の『教巻』にあたるのが、『歎異抄』の第一章で、これは親鸞聖人の教えの全体がここにおさまっているのだということ。聞かせて頂きまして、私は初めて救済ということは、自分が如来の大きな祈りの中に目覚めて生かしていただくということが救済なのだ。救済というのは、迷ったものを大丈夫だと仏の世界に連れていってもらおうというような、そういう利己的な救いではございません。あなたをたすけなければ私は仏にならないという誓願不思議です。誓願不思議というのは、我々が頭で考えたって考え及ばないような、大きな深い如来のお慈悲です。お祈りです。深い祈りです。そのお心に気が付かせて頂いて、一生涯、この南無阿弥陀仏という言葉の深い意味を聞き開かせて頂くことが自分自身の生きる道だということ。を教えて頂いたのです。

それで私は今日、皆様方に聞いて頂く為に資料を作ってまいりました。御面倒をおかけしました。たくさんの印刷物をコピーして頂きました。それで最初にこれを見てください。

これは曾我先生が、昭和三十一年、西暦で申しますと一九五六年の一月二十一日に、アメリカの西海岸のロサンゼルス、日本語では羅府と申しておりますが、ロサンゼルスの別院でお書きになったものです。それはどういうご縁でお書きになったかと云いますと、当時のロサンゼルス別院の輪番さんの奥さんが、「私は僧侶の妻になっておりますけれど、真宗の教えを深く聞かせて頂くことがございませんでした。それで私は、浄土真宗という教えはどういう教えだかということが全然わかっておりませんので、私のようなわからないものにもわかるように何か一筆お書き頂きたいと思います。」と曾我先生にお願いされたら、曾我先生がこれを書かれた。読んでみますと、

佛様とは

一、仏様とはどんな人か

答 仏様は、われは南無阿弥陀仏と申すものであると名のつておいでになります。

二、その仏様はどこに居られるか。

われを南無阿弥陀仏と念じ称える人の直前においでになります。

三、そんならその仏を私達が念ずるにはどのような方法がありますか。

南無阿弥陀仏と、一念疑いなく自力のはからいをして、静かなる心をもって、仏願わくはこの罪深き私をたすけましますと念ずるのであります。

これはだれでも、どこにいても、いつでも、かなしい場合でも、うれしい場合でもたやすく自由に仏を念ずることができるのです。

この念が現前する時いかなる煩惱妄念が襲い来っても内心の平和は絶対にやぶれませ

ん。
是を真の救済と申します。

以上

日本国昭和三十一年一月二十一日

於米国羅府

東本願寺

曾我量深 誌之

これが、曾我先生の教えの中で、一番わかりやすい言葉で、浄土真宗の教えを書かれた、説き明かされた文章だと、私は頂いております。

法然上人が亡くなる前に、『一枚起請文』というものをお書きになりました。大体、法然上人は筆をとって自分で著作をすることをなさらなかった人だったそうです。それで、『選択本願念仏集』も口述されたものを弟子が聞き書きして文章を整えた。ところが『一枚起請文』は、亡く

なる前に自ら筆をとってお書きになったと伝えられています。その『一枚起請文』は、この『聖典』にありますので、ちよつと見ていただきましょう。最後の方です。九六二頁です。

一枚起請文

源空述

もろこし（唐）、我がちよう（朝）に、もろもろの智者達のさた（沙汰）し申さるる観念の念にも非ず。又、学文（問）をして念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ、往生極楽のために、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい（細）候わず。

（『聖典』九六二頁）

これは古文ですので、我々にとっては難しいですけど、当時の人にとっては易しく受け止められていたのです。この『一枚起請文』の御真筆が、京都の岡崎別院の裏通りの浄土宗のお寺（金戒光明寺）に残っています。曾我先生のこの文は、この『一枚起請文』にあたるようなこの易しいお言葉でもって、真宗の深い意味を述べられておるものであります。

それで、私はこの最後のところ、

この念が現前する時いかなる煩惱妄念が襲い来っても内心の平和は絶対にやぶれません。

これは先程、私が戦争のことを申しましたが、我々の内心の平和です。これをどうしたら保てるか。どれだけ人から非難されても、どれだけお前は馬鹿だと云われても、そんなことにびくともしない、ありがとうございますと云えるような人間に自分がなっているかということ。平たく云えばです。お前のようなやつはいない。穀潰しだと云われるようなこともあります。私は自分のことを申しますと、兵隊に行つて貶されるだけ貶された。運動神経が鈍いのですから。その運動神経の鈍いものを兵隊にとつて馬に乗る稽古をさせるわけです。私は馬なんか近寄るのも嫌だった。その馬を毎日、蹄を洗い、背中をこすつてフケを取り、餌をやつて、その馬を一生懸命手入れして、そして馬に乗るわけですが、怖くてそんなに簡単に馬に乗れるものではない。馬に乗つて一番いけないことは落ちることです。そうすると教官が、誰が降りると云つたかと。そう云われると腹が立つのです。腹立つたつて怒つた顔すらできない。黙つてまた馬に乗るよりしようがない。何をするにつけても叱られることばかりでした。お前のようなものが兵隊に来たからいかんのだとしかられる。召集しておいて、お前のような奴が兵隊に来たからだと云われる。自分の意志で兵隊に入った志願兵のように云われ、馬鹿らしくなつて殴り返してやろうかというくらいの気持ちになつたこともございます。そういうことを思う時に、内心の平和というものが

どうしたら保てるか。

つまり、仏教の専門語で云うならば、貪瞋痴の三毒の煩惱。貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩惱をいかに超えられるかということでしょう。もっと大事にしてもraitたい、もっと自分を認めてもraitたいという欲望、それが反対になれば腹が立つのです。それで三番目は、何でこんな所に私は来なければならかったのかな、情けないことだなあというような思いが、いつも胸の中に起つてきて、夜も眠れないことがあるのです。それは内心の平和が破れている証拠なのです。

私が今ちよつと思いつきました、『大乘起信論』（伝馬鳴作^{めみょう}）という有名な書物があります。この『大乘起信論』の中にこういうことがあります。

忽然念起^{こつねんねんき} 名為無明^{みょうむいむみやう}

私の記憶が間違っていないと思うのですが、これは漢文で、「忽然念起 名為無明」ということは、突然その思いが起こってくる。今さっきの話のように平和でない心が起こってくる。それを名づけて無明と為す。無明とは、人間全体の暗さです。無明の闇を破るということが、仏法の一番大事なことなのです。自分で思わなくても突然、寝ている時でも、突然その思いが起こってくる。そういうことが、我々が無明の存在であることを表している。

無明むみやうの闇あんを破はするゆえ

智慧ちえ光こう仏ぶつとなづけたり

一切諸いっせ仏ぶつ三乘さんじやう衆しゆ

ともに嘆たん譽よしたまえり

（『浄土和讃』『讚阿弥陀仏偈和讃』〈第九首〉 四七九頁下段）

という和讃があります。この無明の闇を破ってください。そういう用（はたら）きが、南無阿
弥陀仏。つまり、言葉になった如来。私は曾我先生から非常に大きなことを教えて頂いた。それ
は、釈尊は人間の姿をとって、今から二千数百年前にインドで、八十歳の一生を終えられて涅槃
に入られた。つまり、応化身である。我々を救うために、この人間世界に現われたのが釈尊
である。一般には、仏教は釈尊から始まっておるのだと普通は思っているけれども、そうではな
いと曾我先生は云われた。それは何かと云うと、釈尊以前の仏教だと。どうしてそういうことを
云われるのかと私は不思議でならなかったのですが、釈尊はこの世に出られる前に、釈尊をして
釈尊たらしめる、お釈迦様をしてお釈迦様たらしめる、言葉になった如来がある。それが南無阿
弥陀仏である。こういうことを教えられた。

『親鸞の仏教史観』という本があります。普通の仏教史というのは、釈尊から始まっている仏
教史。ところが、曾我先生はそういうことを仰らなかつた。普通の仏教史は、学者が研究して作

ったもので、本当の仏教史ではありません。本当の仏教史は何かと云ったら、南無阿彌陀仏という言葉になった仏から始まっている。その南無阿彌陀仏の意味が、本願として展開して、その中から釈尊がお生まれになられた。そう云われるけれど、普通の学者はそれを肯定しないのです。それは曾我量深師の勝手な云い方だという具合に思っている人がほとんどです。大谷派の出版部から『親鸞の仏教史観』という書物が出ておりますから、皆さん、読んでみられたらと思います。私はそのことを聞きまして、親鸞聖人の『御和讃』に、「彌陀成仏のこのかたは」という和讃が二首あるのです。最初は皆さん一緒にいつも称えています、

彌陀成仏のこのかたは

いまに十劫をへたまえり

法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり

（『浄土和讃』『讃阿彌陀仏偈和讃』〈第一首〉四七九頁上段）

という、どなたでもご承知の『浄土和讃』の最初の和讃です。ところが、もう一首あるのです。

彌陀成仏のこのかたは

いまに十劫じゅうこくとときたれど

塵点久遠劫じんてんくおんじょうよりも

ひさしき仏ぶつとみえたまう

（『浄土和讃』『大経意』〈第五首〉 四八三頁下段）

という和讃なのです。これはなかなかわからない。

ところが、私は曾我先生の教えを聞かせて頂いて、一般教学の方で仏教史をどう云うというよりも、我々の信心の上からこの南無阿弥陀仏から仏法は始まっておるのだということを、この和讃が表しているのだと気が付きました。「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど 塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまう」というのは、塵点というのは、塵のような見えるか見えないようなことですから、我々が想像を絶した昔からという意味です。それを私が現代語に翻訳しますと、人間が言葉を使って、社会生活を始めた頃からと私は了解しております。他の動物と違うのは、人間は言葉を使う。その言葉を使って、社会生活を始めたのは何億年前か私はわかりませんが、その頃から南無阿弥陀仏という言葉になった如来が、我々の根本的な救済の用はたらきをしておられる仏なのです。絶対者というのではないのです。言葉の用はたらきとして、一人一人のうちに宿はたらっていたただく如来が、塵点久遠劫の昔からずっと我々の上に用はたらき続けてくださっている。その如来の用はたらきを今頂いて、私が煩惱の障りから解放される世界を会得させて頂いて、あり

がたいことでございますと、深く感謝せざるをえない。そのことを今から七百五十年も昔に親鸞聖人が教えてくださった。

「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。」と『行巻』（一五七頁二行目）にあります。単なる行ではない。行ということは、純粹行為ということです。単なる聖道門的な純粹行為ではない。大行という行は、人間が作り出した自分で努力してこの行をするという、そういう行とは質が違って、一切の衆生が、生きとし生けるものが救われなかったら私は仏にならないという如来の大きな心がこの言葉一つになっている。南無阿弥陀仏となっている。そのことに私はびつくりしました。

私は自分で自分の心の平和が保てない生活ばかりしていたのです。それで相手を憎むということがあるでしょう。人から何か云われると、自分はそんなものではないはずだと反発する。反発すればするほど云われる。云われれば云われるほど腹が立つ。その腹立ちの心を、自分でどうしたらおさまるかということになりますと、おさまらないので酒を飲む。酒を飲むというのも、酒の味をめでて飲むのなら趣味です。ところが、自分の平和ではない心をどうしたら一時的にぐまかせるかというようなことでお酒を飲んだら、これは本当に情けないお酒の飲み方です。この頃は飲酒運転ということがものすごい問題になっておりますので、車に乗られる方は、乗る前にお酒を飲まれることはないと思います。やっぱり家で酒を飲むというのも、酒が美味しいから好

きで飲むというのならいいが、自分のどうすることもできない思いを、一時的にごまかすために酒を飲むのだったら悲しい酒です。

内心の平和が絶対に破れませんとは、そういうことが必要でない世界です。これを真の救済と申します。自分の心がどんなに暗くなっても、南無阿弥陀仏と申せば、それはあなたの煩惱ですよ。それはあなたの煩惱の用はたらきが今出てきたのです。その煩惱の用はたらきが出てくるような身に、あなたは昔からなっているのです。それは単なる今起こったことではありません。こういうことを一瞬にして知らせてくださる。これは他人が悪いのではなくありません。また、社会が悪い、時代が悪いというのではありません。私の煩惱が、今私の中で私を暗くしている。

無明煩惱むみょうぼんのうしげくして

塵数じんじゆのごとく遍満へんまんす

愛憎違順あいぞういじゆんすることは

高峯岳山こうぶつがくざんにことならず

（『正像末和讃』 第七首 五〇一頁上段）

という和讃があります。「無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す」とは、数限りない塵芥のように私の中に煩惱を内蔵している。今まで可愛いなど思っている、条件が悪くなると憎く

なる。今まで憎んでいたものも、ちょっと自分にとって条件がよくなると可愛くなる。愛憎違順という。そういう心の激しい動きというものが私の一生である。「高峯岳山にことならず」とは、高い山のような、そんな具合に私の心を平和でなくしている。その平和でない私の心を一瞬に平和にしていた^{はたら}く用きが、南無阿弥陀仏です。それがその時だけに留まるのではなく、一度そのことが自分に会得されると、どういう心が動いた時でも、南無阿弥陀仏と申す。南無阿弥陀仏と申すことによって、如来の願力、本願力が私の胸に沁み透ってください。私の胸に如来の大悲が沁み透ってください。そういうことを一言で表してあるのが、無碍光如来ということ。障りのない光を無碍の光という。

ここにこのような資料を作っていました。これを見てください。これは『尊号真像銘文』です。皆さん、あちらに愚庵があります。昔、この本堂ができる前に、座談がされていた愚庵の御本尊は「帰命盡十方無碍光如来」。それは、親鸞聖人が御真筆の名号が八種類あるのです。この表では、その八種類のうち、一つが欠けているのです。これは七種類しかありません。一つ欠けているのは、東本願寺に所蔵されております。A4紙ぐらいの大きさの紙に、「南無阿弥陀仏」とただ書かれたものです。それで、親鸞聖人の御真筆の名号は、これと東本願寺に所蔵されている小さな御名号と八種類ある。その八種の中で、讚文のない五番目と、それから東本願寺に許されてある小さな南無阿弥陀仏を除いて、あと六種類が完成された名号だということを、藤島達朗

先生が仰っておりまして、それは、親鸞聖人の御真筆の写真を集めた法蔵館から出ている本の中にそう書いてあります。それで一番親鸞聖人が尊く頂かれたのが、「歸命盡十方無碍光如来」。その意味を次のように書いてある。『聖典』の五一八頁の三行目からです。

「歸命盡十方無碍光如来」ともうすは、歸命は南無なり。また歸命ともうすは、如来の勅命にしたがうところなり。盡十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。盡十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとするべしとなり。「願生安樂国」というは、世親菩薩かの無碍光仏を称念し、信じて安樂国にうまれんとねがいたまえるなり。

(『尊号真像銘文』五一八頁)

これを読まれたら、南無阿弥陀仏が我が身の中でどういう用きをしてくださるか一遍でわかります。『教行信証』の言葉は非常に難しいが、『尊号真像銘文』のこのお言葉は非常に易しく述べられてあります。親鸞聖人が、この八種類の名号を作られた中で、「歸命盡十方無碍光如来」と

いうのが四つあります。その名号の上と下に本願の文とか、あるいは『大経』の中の文、あるいは世親菩薩の『浄土論』の最初のお言葉が、この上下に書かれておる。それがこれに出ておりますから、それを書かれたということはどういうことかということ、この「帰命盡十方無碍光如来」という、つまり、南無阿弥陀仏という御名号によつて、どのように我々が救われていくのかという内容とか、その道理が上と下に述べられておる。これは一席の法話でお話し申し上げるのはとても難しいことです。また後程、機会を頂いた時に申し上げたいと思います。「帰命盡十方無碍光如来」とは、平たく云えば、障りがあったものが全く障りでなくなる精神生活ができるようになるという用はたらきが、南無阿弥陀仏です。

それで私は、『歎異抄』第七章（六一九頁）のお言葉を非常にありがたく思っております。「念仏者は」と書いてありますが、これは「念仏は」と読むのが正しいのだといわれる説があります。これは国文学者が云われるのであって、別にそういうことにこだわる必要はありません。書いてある通りに読んでも構いません。

一 念きんぶつ仏者は、無碍むがいの一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇てんじんじぎも敬伏きやうふくし、魔界外道まがいげいどうも障碍しょうがいすることなし。罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍むがいの一道なりと云々

（『聖典』 六一九頁）

つまり、念仏道というのは、全く障りにならない生き方ができる道である。自分の内心の煩惱をはじめとして、外から私を誘惑するものやら、私を引き付けようとするものやら、私は煩惱による祈りの対象として引つかからない。そういう世界を明らかにしてある。つまりこれは、「歸命盡十方無碍光如来」の用はたらきだということを確認にしてあるのが、『歎異抄』の第七章です。

しばらく休憩を頂きます。

〈休憩〉

それでは、もうしばらく聞いて頂きます。先程、無碍ということをし申し上げまして、碍というのは障りということですね。障りも色々ありまして、自分の内側の煩惱の障りというのが、一番これが問題なのです。煩惱障と申します。煩惱によって言動する。たとえば、人にお世辞を云ったり、悪口を云ったり、そういうようなことを知らず知らずしている。それを業障と申します。身・口・意の三業というのは、我々の言動ということですから、報障といって、業の報いに障りが出て来る。煩惱障・業障・報障ということを善導大師が仰られるのですが、とにかく、障りがいっぱいある中で、それをどういう具合に、うまい具合に処理して、我々が明るく生きるかといつも考えている。考えているけれども、やっぱり真実の教えに遇わないと障りがほどける時がない。

蓮如上人は、仏（ほとけ）という言葉をお使いになるが、親鸞聖人は仏（ぶつ）という言葉をお使いにならない。親鸞聖人は仏（ぶつ）というわけです。それはなぜかという、（ほとけ）という訓は（ほとおりけ）という疫病神という意味を昔もっていたので、そういう言葉は使わないというのが親鸞聖人のお心のようです。

ところが時代が変わって、蓮如上人はそういうことは問題にしないで、仏（ほとけ）というのは、

ほどけるとという意味があるのだと上人は解しておられる。ほどけるとは、障りになったものが障りにならないという、そういう世界を我々に付与してくださる。南無阿弥陀仏が我々の信心となつて、私のこの愚かな身の内で、呼び覚ます用はたらきをいつも起こしてくださる。つまり、召喚の勅命という言葉がありますが、これは南無阿弥陀仏が私の信心となつて、私に浄土を願えと叫んでおられる、それが聞こえた時のことです。南無阿弥陀仏と申すことは、ただ発声するとか、発音するとかではありません。我を馮たのめ、我を依り処にして浄土を願え、その叫びが、つまり、二河白道で云つたら、西岸上の声が私の内側に用はたらいて、いつも自分の障りが解けていく。そういうことを蓮如上人はほどけると云われる。そのことを具体的に表しているのが、『歎異抄』の第七章だと思います。

それで、曾我先生から聞かせて頂いた話なのですが、『歎異抄』が尊いところは口伝だと云う。口伝とは、親鸞聖人が仰られたことを弟子が直接聞かせて頂いた。それが耳底に留まるところ、自分の記憶の中に留まるところを書いた。こういうことで、ここには人をわからせるためにこう云つた方がよかろうという計らいは全くない。ぱつと聞かせて頂いた大事なことを書いてあるわけです。唯円大徳が師訓十ヶ章を前にだして、後に異議八ヶ章をだし、最後の後序の中にまた親鸞聖人のお言葉を入れているわけです。

その師訓十ヶ章の第七章に、先程読みました「念仏者は無碍の一道なり。」、その最初の「天神

地祇も敬伏し」ということは、ちょっと言葉が難しくてわかりにくいのですが、天の神様、地の神様が、信心の人に、あなたは結構な精神を会得せられましたと、神様の方が頭を下げて我々を敬われる。言葉通りに云ったらそういうことです。それを徳川時代の学者は、これはインドの神様のことだという具合に講釈している方もいるわけですが、私は自分勝手な解釈か知りませんが、民族信仰です。民族は日本民族の民族です。それからもう一つの民俗は、民という字の下に世俗の俗を書いて、蛇を信じたり、なにか動物に神格を与えて信ずるような民俗信仰です。この両方の信仰に引つかからない。もっと具体的に云えば、日本の民族信仰は、神社の信仰です。神社の前に行きますと、『厄払い』と書いてあります。それから、交通事故がないようにと自動車の前でお祓いをしたりしております。神様に特別の力があって、祈りをした者に特別な奇跡があるというような信仰です。要するに奇跡信仰です。そういうものに引つかからない。「天神地祇も敬伏し」とは、こういうことだと思います。

私は三重県の生まれですが、三重県の真宗門徒は高田派が多いです。高田派の本山が津の一身田という所にありますので、南部の方は高田派のご門徒が多いのです。ところが、伊勢市に伊勢神宮があります。ですから、こちらの方の民族信仰もなかなかでありまして、何処の家にも神棚がありまして、それで普通は、今の若い人はどうか知りませんが、私ぐらいの年のものは、まず朝起きたら神棚のところにお礼をして、二礼二拍して、それで仏壇は自分のお内仏なんだけれど

も、南無阿弥陀仏をご本尊としていることがはっきりしないで、自分のご先祖がおられるところだというような理解をしてお参りをするというのが、大体普通のところですよ。そういう中で私は大きくなったわけですよ。もちろん寺には神棚はありません。一般の家には必ず神棚がある。それで、ある僧侶が神棚を降ろす運動をしだしたら、神職の方がびっくりして、仏壇の横にスペースが空いているから、そこに神棚を安置する運動をした。そういうことで、なかなか民族信仰から解放されるのは非常に難しい。神棚があるとかないとかよりも、なにか奇跡信仰。神を信じて奇跡を願うという信仰から解放されることが難しい。南無阿弥陀仏という言葉によって、奇跡を期待するような我々の心は煩惱であるということをおまことにわからせて頂く。また、他の宗教と仏教と違うところは、仏教は絶対者をたてないのです。仏教の言葉で絶対者のことを尊祐そんゆうと云うが、それをたてない。絶対者の力によって、奇跡をもらうような信仰から解放される。なぜ解放されるかということ、法というものが、これが仏法の根本であるからですよ。

法というのは、ダルマ、真如、真実の道理そのものが、これが仏教の中心である。真如。その真如ということが、言葉になっていないから、我々に真如とはどういうことかと考えて、それにまた迷うということがある。その真如が言葉になったのが、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏と、誰でも、何処でも、いつでも、どんな心でも、称えられる言葉になって、真実の道理が私を呼び覚まし、私を目覚ましてくださるその用はたらきが、南無阿弥陀仏ですよ。その用はたらきが、無碍ということ

です。障りがなくなる。障りが翻る。転ということを皆さんご承知でしょう。転というのは、自転車の転です。上にあつたものが下にくる。下にあつたものが上にくる。つまり、翻る。一般仏教で云つたら、転依てんねという。

平たく例えて申しましたら、今丁度時期ですが、渋柿の皮を剥いて干しておけば、いつの間にか甘くなる。渋を抜いて甘くしたのではなくて、渋そのものが甘く変わるといふわけです。そういうことを転という。

我々の煩惱が菩提の体となるということは、つまり転依ということですが、南無阿弥陀仏はたらの用きによって、我々の煩惱が転じてさとりとなる。煩惱は自分の力で無くしてしまうというのが自力聖道門の教えです。ところが浄土真宗は、自分の力で自分の煩惱を無くしてしまうというようなことはできない。そのできないような私たちが、南無阿弥陀仏はたらという言葉の用きを頂く。つまり、本願に感応するというわけです。南無阿弥陀仏の言葉の用きを頂くというのは、抽象的かわかりにくいですが、あなたをたすけねば私が仏にならないと誓われておる大慈悲の本願は、私のために起こされた本願だと深く頂けるといふことです。人ごとではないということです。私のために起こされた本願であると頂くことができるようになります、時が来て、師匠の教えによって、そのことが領けるようになると、煩惱がそのまま翻って菩提の資糧になる。

そこに先程具体的に申しました、情けない心やら、人に叱られたり、悪く云われたりして腹が

立つその煩惱の中に、「貪瞋煩惱の中によく清浄願往生の心を生ずる」と善導大師が云われます。二河白道の喩の中に、そういう言葉があります。

貪瞋煩惱中 能生清浄願往生心

善導大師のお言葉です。一般の読みは、「貪瞋煩惱の中に、よく清浄願往生の心を生ずるに喩う」という言葉があります。この『信巻』の最初の方です。二二〇頁の後ろから三行目、

「中間の白道四五寸」というは、すなわち衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩うるなり。（『教行信証』『信巻』 二二〇頁）

これは親鸞聖人の読み方です。「生ずるに喩うる」のが普通の読み方です。「生ぜしむる」と読まれるのが親鸞聖人の読み方です。「能」という字は大変深い意味があるのですが、この『聖典』は「よく」と仮名で書いてあるのです。能というのは、他力を表すと私は思う。「能生清浄願往生心」。人間のできないことを他力不思議によって、私に可能にならせて頂く。そこです。

「他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり」（『正像末和讃』 第五四首 五〇五

頁)と。我々人間の理屈は立てる必要はない。南無阿弥陀仏、一言申せば、我々の障りが全て転じて浄土に往生させて頂きたいという心になる。つまり、欲生我国ということ。「至心信樂欲生我国」。浄土に往生することが、死んでから先のことにしているような了解ではありません、これは。「現に救済されつつあるを感ず。」という煩惱が生じて、その煩惱を転じて、浄土を願う心にならせて頂く。こういう世界です。私はこの教えに遇わなかったなら、もうとつくの昔に頭がおかしくなったか、自殺しておったかでしょう。

それで最初に申しました、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」(六二六頁五行目)、光の中におさめとられている私だということがわかる。闇が起るたびごとに、南無阿弥陀仏が用いて、私が今、如来の光明の中におさめとられているという感じとらせて頂く。撰取不捨ということ。撰取不捨の利益にあずけしめたもうなりと。ご利益とは仏教語ですけれど、普通は利益(りえき)とは、お金が儲かる利益です。同じ字を使って、利益(りやく)と読みます。『大無量寿経』の最後の方(八六頁六行目)に、弥勒菩薩に対して念仏を称えると大利を得ると教えてある。大利とは大きな利。大利益とはいったいどういうことなのかというと、煩惱が転じて菩提の資糧となることが大利益です。今さとしたというわけにはいかぬが、自分はさとりを得る世界を会得させて頂いた。現生不退ということ。す。

現に救済されつつあるということです。

これが無碍の一道だということが、曾我先生の教えに遇ってからですから、六〇年位ですが、約六〇年かかって、やっとわからせて頂きました。お恥ずかしいことですが、長い時間がかかりました。やがて命終わらなくてはなりません。無量寿ということは、私の命は限りあるけれども、本願の大きな用きは限りがない。私の命が終わっても、私はこのはかり知れない南無阿弥陀仏の命の中におさめとられていく。このことが領けて、命終わっていくということです。

煩惱で考えたら死ぬことが一番恐ろしいことです。今動いていた身体が止まってしまつて、焼かれてしまう。本当にこんな情けないことはない。一生何のために生きてきたのかわからない。最後は、なにもかも自分のものと平素思つていても、自分からはぎ取られてしまつて、身体も焼かれてしまうのだと思うと、これほど情けないことはない。これが煩惱です。

ところが、無量寿ということをお親鸞聖人の教えの中で頂いておりますと、歸命無量寿如来、無量寿ということは、この南無阿弥陀仏の用きははかり知れないということです。寿命ということとは、我々が云っているいわゆる寿命ということとは違ふのです。これはね。子供が生きているカメを買つてきて飼つていて、カメが死んだら、電池が切れたと云つたという。そういうことではないのです。我々の身体の命は有限なるもので、いつ終わるかもしれない。それを悲しみ悩む心がすべて翻つて、そして、無量寿という世界は、これ南無阿弥陀仏の命。本願の大きなお用きは

中に、私は帰命させて頂くのだということです。そういうことを私は感じております。

もう時間が来ました。三時で終わります。三〇分間、質疑応答の時間を取らせていただくことになっておりますので、まだまだ話すことはいくらでもありますけれど、今日はこれくらいで終わらせて頂きます。引き続き、ご質疑を頂いていきたいと思えます。

佛様とは

一、仙様と体どんな人か

答、仙様は、ゆれば南无

阿彌陀仏と申すものであ

ると名のつておこなひます。

二、その仙様はどこに居るか

ゆれば南无阿彌陀仏と念し

称する人の直前に居ておこなひます。

三、そんな所の心を知達知念

するにほどのやうな方法が

ありませうか

南无阿彌陀仏と念疑なく

自力のほかにござります。

静なる心を以て、仙様に

は、この罪深き私をたす

けまして世と念するおこなひ

を成すにたす、と、にるて、

いづて、かた、堪合ても、地し

に堪合てもたす、と、自由は

念することか、ま、する、

この念の現前する時、かなる煩

悩心を念の教養を、て、心、

平和の体相對に、た、た、せ、

長空真の救済を申します。

以上

日本国昭和卅二年一月廿日

大末國羅庵

寫、我量深

誌之

〈座談〉

(司会)

先生ありがとうございました。ここから質疑応答の時間にさせて頂きます。お聞きになりたいこと、あるいは今日のお話だけではなく、日頃思っていることでも結構でございますので、お手を挙げてお訊ねしてみてください。いかがですか。

(淡海)

いつもありがとうございます。本当にこの一年が早かったという思いがしております。去年、この席で先生のお話を報恩講として聞くということができ、私にとって楽しみです。また、今年こういう風に報恩講を迎えることができましたことを嬉しく思っております。ありがとうございます。

今日は、先生の方から曾我先生のお言葉のコピーを頂きまして読ませていただきました。私にはこれが一番分かりやすいものだという表現で先生がご説明くださったのですが、三番目のところに、「自力のはからいを捨てて」という文章がございます。私自身は自力のはからいを捨てることのできない人間で、どうしても、例えば、南無阿彌陀仏という時にも、自力のはからいを捨てることのできないので、どうしてもはからっているのです。そういうのが人間の姿ですよ。それなのに、ここに曾我先生が、「自力のはからいを捨てて」という書き方をしているのが、ちょっと不思議に思ったのです。

が。阿弥陀経の部分で云う、そういうふうにして一心不乱に念仏申せという所の部分で申されているとは思いますが、曾我先生の言葉が、私にはここが引つかかってしまうものですから、いかがかと思ひまして。

(先生)

「南無阿弥陀仏と、一念疑いなく自力のはからいをして」ということは、これは『大無量寿経』の後の方に『顕開智慧段』というところがございまして、そこで我々が善悪の世界に囚われて、自分の心を善くして念仏しなくてはならない、悪い心で念仏を称えなくても功德がないのだというような、そういう妄念をおこす。

ところが、念仏はどういう心が起こっても、どんな醜い心がおこっても、それがご縁で南無阿弥陀仏と称えさせられておるのだと気が付かせてもらうのです。我々は、どうしても善悪の世界から自分の力で抜け出られないのです。動物の生活には善悪はないのですが、ところが我々人間は社会生活する上に善悪を立てなくては生きていけないわけですから、そういう習慣がこの信心の世界にまで入ってきて、善い心で念仏すれば功德がある、悪い心で念仏すれば功德がないどころか、前の功德が消えてしまうのだというような、そういう心でお念仏申してもたすからないのだということです。

いかなる心が起こっても、悪い心が起こっても、善い心が起こっても、善悪の心が起こるのは宿業の果として善悪の心が起こってくるのだということを、仏がちゃんとしらし

めしておられるから、善い心が起ころうと、悪い心が起ころうが、それをかけがえのないご縁として念仏申しなさいということだと、私はそう了解しております。

(淡海)

ありがとうございます。煩惱を滅することはできなくても、煩惱があるままにそれが浄土に往くためのひとつの種になるということが、私にとっては本当にありがたいと思っております。それこそ南無阿弥陀仏という言葉がそこにあると感じております。ありがとうございます。

(先生)

そうです、願生浄土ということ。「かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。」ということが、本願成就の文(『聖典』四四頁八行目)にあります。それは我々一人一人がこの世の幸せ、つまり、自分の思うようになるようなことが少しでも増えていくことを願って幸福追求の生活をしている。そうだけれども、いつもそれが裏切られたというような思いで困っている。その私が、南無阿弥陀仏のおかげで、かの国に生ぜんと願わずということ。これが、仏の大きなお力で浄土に生まれたいと願うということ。です。

本願のお言葉で云えば、欲生我国です。我が国に生まれんと欲え。つまり、純粋な光明の世界を生きるようにしなさいと。この世の幸福は、その時その時の縁次第で変転していくものであり、それを追及していても、得られることがあっても、また失われること

もある。そういう幸福を自分の力で追及するということの愚かさに気が付いて、浄土を願いなさいということが、如来から我々にいつも示されている。欲生我国ということは、如来諸有の群生を招喚したまうの勅命なり（『教行信証』『信巻』一三二頁八行目）。如来の本願が私を呼び覚ましてくださっている。その御心にいつも気が付いて、浄土を願いなさいということでございます。そのところが真宗の有り難いところであります。また曾我先生より、この本願の三心は、欲生に始まり欲生に終わるといふ具合に教えて頂きました、ここが大事なところだと私はいただいております。以上です。

（司会）

他にございませんか。

（岡田）

先生、どうもありがとうございました。報恩の気持ちを一言述べたいと思います。

生きていますと人の道として辛く悲しい切ない苦勞があります。救われるはずのないこの罪深い私が、欲と妬みの煩惱に振り回されておりました。その私が光明の世界を頂くことができました。

先生にお会いできまして、仏の救済を教えて頂きましたことは、なによりもの歓びでございます。

また、「世の中に あだに悲しき身を知れと 教えて帰る子は 善知識かな」と、和泉式部が詩を作られておりますが、それと同じく私も、若くして浄土に還りました息子を

還相回向と頂いております。この無死への最高のものだと、私は、先生並びに息子を仰いで頂いております。

以上でございます。どうか、またずっと聴聞させて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

(先生)

私個人のことを申しますと、私の姉は、私が生まれる前に赤ん坊で死んでしまいました。私の弟は、二十一歳まで生きていたのですが、戦後の酷い食糧難の事情の時に、栄養が取れずに結核で若い命を落としました。それからその後、一人男の子がいたのですが、それが皆、三つとか五つで亡くなってしましまして、私が一人残っておるようなことであります。

姉のことは会ったことがないので、私が生まれる先に亡くなったのですから、その弟のことは様々思っています、あの子が生きていればいくつだとかいうようなことが夢に出てまいります。そして、八十八になりますと、余命僅かだと思っておりますね、そのことが重なって何かこう、云うに云われぬ寂しい思いを起こすことがございます。それは夢の中で出てまいりましたり、夜中に目を覚めて眠れない時に妄念が起るような形で出てまいりましたりします。そういう時に私は、この教えに遇わせて頂いて、念仏申せということを改めて感じさせていただくのでございます。

ちよつと話が変わりますが、九月の十六日に、新宿の北川さんが九十六歳で亡くなりました。その方は一生涯、非常に仏縁の深い生活をされて、私が十数年間から、毎月例会にお邪魔して、ご一緒に『聖典』を読んで参ったのですが、その北川さんが、昨年十一月にお会いして、その後はお会いできなかったのが、急に老衰が進み、病気が進んで、九十六歳で九月十六日に亡くなって、その方のお悔みに参りましたら、ご挨拶状が印刷されてありまして、そのご挨拶状は普通でしたら、遺族が会葬のお礼としてのご挨拶状なのですが、それをご自身が書いておられるご挨拶状であつて、私は自分の妻とか子供を亡くしまして、諸行無常ということを深く感じとらせて頂いて、真宗の教えを聞かせて頂くようになりまして、信念をはっきりさせて頂きました。ありがたいこととございます、というような感謝の言葉がこのご挨拶状に書いてあつた。こういう会葬のご挨拶は珍しい。私は、それを自分のこととしてですね、お前はこういうはっきりとした信心の人になつていのかということを再び問われているように思ひまして、そのことを思い出しまして、今、岡田さんの話を承つたようなことでございます。

私が親鸞聖人の言葉から、「聞思して知慮することなかれ」（『教行信証（総序）』一五〇頁二行目）という言葉が『総序』の中にあります、信心が留まるのではなくて、どんどん深まっていく。これでわかつたのだ、これでおしまいだというようなことではない。

南無阿弥陀仏一つだということは間違いないけれど、それをどのように自分の身に振り当てて、深く頂いていくかということが、一生の課題だということを思わせて頂いております。以上です。

(司会) どうもありがとうございます。他にございますか。

(江島) 仏教は南無阿弥陀仏という言葉から始まっているとおっしゃって、お釈迦様から始まっているのではないという今日のお話でした。仏教は絶対者をたてずに法をたてる。その真如が言葉になったものが南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏という言葉は、大乘仏教が出てきた時に、南無阿弥陀仏という言葉が初めて言葉として出てきたのでしょうか。

(先生) 一般の仏教史で申しますとですね、釈尊が亡くなりました後に、仏弟子が釈尊の教えを暗記していたものを文字ができるまで暗記のままに伝えてきた。文字ができた時に、それを文字に直してできたものがお経だということで、そのお経を弟子から弟子に伝えていって、そのお経の分析をするようになったのが部派仏教という。きわめて複雑な教義を形成してきたわけですね。ところが、それは出家の場合であって、在家の人が釈尊の教えを聞いてきた歴史があるわけですね。その歴史というものは、大乘教というものの中には出てまいりません。出てまいりませんけれども、出家の弟子が修行して悟りを開くという道が、これがだんだん時代とともに衰えてくる。正法の時代から像法の時代から

末法の時代へと動くことによって、出家の仏教がだんだん衰えてくるということがありまして、一体、衰えないところの仏の教えはどこにあるのかということを求める大きな在家の求道心というものが、だんだん広がり深まっていくのであります。そういういわゆる聖道門の出家仏教から在家のものが在家のままです。この南無阿彌陀仏という言葉のかと求める求めの中で、そういう意味の求道心の中で、この南無阿彌陀仏という言葉になった如来が、本来の如来であるということ。親鸞聖人に顕かにしていただきたいわけです。それを曾我先生が、『親鸞の仏教史観』として教えてくださいます。それは我々人間が言葉を使い始めた頃から、南無阿彌陀仏という大きな言葉になった如来が用はたらき続けてくださっているのだという歴史観を私たちに教えていただいたのが、曾我量深先生の『親鸞聖人の仏教史観』でございます。それは、いわゆる東大系の仏教学者の方々は、そういうことは認めないわけです。ところが、曾我先生は認める、認めないということではなくて、自分自身が救われるというその一言において、その一大事において、親鸞聖人の教えを聞かせて頂くと。釈尊以後の仏教というのではなくて、釈尊以前の仏教というものだというところを感得されたわけです。

私は曾我先生がなぜそういうことを云われるのかを『聖典』の上で求めましたところ、先程申しましたように、「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど 塵点久遠

劫よりも ひさしき仏とみえたまう」という『浄土和讃』「大経意」△第五首▽（四八三頁）があり、そのことが一つの文献上の証明であるということをおは思わせて頂いているわけがあります。つまり、学者になって救われるのではなくて、信心の人となって救われていくという立場で、南無阿弥陀仏という言葉は、法が言葉になったということをおは、ダールマが言葉になったということをおは深く信じさせて頂くのであります。私はそういう具合に考えております。以上です。

（司会）
どうもありがとうございます。どうぞ。

（田中）
先生、今日はありがとうございます。丁度一年振りに先生にお会いできて、本当にありがたく思います。先程、淡海さんの方から、曾我先生の言葉のご質問がありました。その後のところ、「この罪深き私をたすけましますと念ずるのであります。」は、最初読んだところ、これは私の祈りかなと思っただけです。先生の話をお聞かせ頂いて、この仏の我が国に生まれよという願いが、私が感得できた時に、それが私の願いとなると考えてよろしいのでしょうか。

（先生）
如来の大きなお祈りの心、本願の心が背景にあつて、自分が浄土を願うというこの願生心を生ぜしめていただいております。蓮如上人のお言葉で云えば、「南無というは、仏たすけたまえと申す」ことが南無ということ。ということは、もっと難しい言葉で云えば、

歸命の一念というものは、如来の本願によってですね、我々に歸命の一念というものが起こるのだということ、これは善導教学からこちらへずーつとですね、顕かにして頂いているところでございまして、ここだけを読みますと自分で願うようになりすけれども、先程書きましたように、「貪瞋煩惱の中に、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喩うるなり。」(二二〇頁一四行目)と、親鸞聖人が二河白道を読んでおられる。その「能生清淨願往生心」ということ。この「能」ということに他力ということが表わされているのです。「能」というと、自分の能力のように聞こえますが、「よく清淨願往生の心を生ぜしむる」という。そこにこの他力不思議ということがあります。

「聖道門のひとはみな自力の心をむねとして他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信じせり」(五〇五頁△第五四首▽)という『正像末和讃』の一首がございす。自分のたてた理屈を前面に立てないのだということ。「義なきを義とす」とは、はからいが無いのが本義であるということです。こういうことです。『歎異抄』第十章の「念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき。」(六三〇頁七行目)とあります。これは、法然上人がずっと仰っておられたことで、これを『歎異抄』の第十章に述べられておるのだということ、私は聞かせていただいております。以上です。

(田中) ありがとうございます。

(司会) どうもありがとうございます。お聞きになりたいという方、おいでになりますか。

(住職) 先生、一言。「往生心とたとえるがごとし」ですが、「心」を入れた方がいいですね。

(先生) はい、そうです。

(司会) どうもありがとうございます。それでは、この辺で質疑応答を終了させていただきますね。

櫟先生、長い時間ありがとうございます。

あとがき

本書は平成二三年十月三十日、第二十一回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

報恩講を迎えるたびに光照寺の歴史が積み重なっていることを痛感します。又、故細川巖先生
のあと、報恩講三回目より櫛先生にはご教導賜りまして、誠に感謝致しております。本書のテー
マは、私達に投げかけていると同時に、先生自身が常に自らに振りかえって問い続けていること
を感じます。

浄土真宗の教えとはどういうものか、毎回丁寧にご講話頂いておりますが、救済ということに
触れている箇所では先生は、「救済ということは、自分が如来の大きな祈りの中に目覚めて生かし
ていただくということが救済なのだ。救済というのは、迷ったものを大丈夫だと仏の世界に連
れていってもらおうというような、そういう利己的な救いではございません。あなたをたすけなけ
れば私は仏にならないという誓願不思議です。誓願不思議というのは、我々が頭で考えたって考
え及ばないような、大きな深い如来のお慈悲です。お祈りです。深い祈りです。そのお心に気が
付かせて頂いて、一生涯、この南無阿弥陀仏という言葉の深い意味を聞き開かせて頂くことが自
分自身の生きる道だということを教えて頂いたのです。」とお話下さっています。

私達は自分の都合の良いようにお話を聞いてしまいがちですが、一生涯、南無阿弥陀仏という言葉の深い意味を聞き開く求道の歩みをこの報恩講に確かめていきたいと思えます。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた伊東良英氏に感謝申し上げます。合掌

平成二四年十月二十八日

第二十二回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎